

モニタリング情報を活用して、観天望海

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋山, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008557

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



水は巡る

— モニタリング情報を活用して、観天望海! —

東シナ海海洋環境部長 秋山 秀樹

この冬は太平洋赤道域で発生したラニーニャ現象(*)の影響で、日本付近は厳しい寒さとなっています。西海水研の位置する長崎市でも、今冬は積雪することが複数回ありました。昨年来、私たちにとっては厳しい気象の変化が続いています。

まず、平成22(2010)年春季、西日本を中心に低温状態が続きました。次に、夏季には一転して全国的に記録的な猛暑となり、陸に住む人間も、海に住む魚介類も大変苦しみました。この猛暑の影響は長期化し、水産業は甚大な被害を受けました。続く秋季は短く、あっという間に過ぎ去りました。そして、この冬季には強勢な寒気団が猛威を振るっています。

西海水研では九州西岸で定地水温モニタリングを行っています(西海水研HP「九州沿岸域水温情報」)。その一例として、熊本県天草町の水温変動を図1に示します。黒丸印+点線が平年の水温変化、青色の折れ線が2010年の水温変化、赤色の折れ線が2011年の水温変化を表しています。

この図を見ると、上で述べた各季節の特異な気象の変化に伴って定地水温もよく似た変化をしていることがわかります。2010年春季(4~6月)水温が低めで推移していたのに、同年夏季(7~9月)には一転して水温が著しく高温になっていました。さら

に、2011年冬季(1月)は水温が低めで推移しています。

今冬の定地水温モニタリングの情報を長崎海洋気象台発行の西日本海況旬報(No.2270)と比較してみると、両者の水温値がよく一致していました。そこで、西日本海況旬報から、今冬(1月中旬)の東シナ海域の水温分布の特長を調べてみました。水温値は平年差(30年平均値との差)および前年差とも、海域全般で-0.5~-1.0℃程度低め傾向で推移していました。長江河口沖合は低め傾向が大きく、-1.0~-2.0℃程度低めで推移していました。

気象庁のエルニーニョ監視速報(No.220)によると、今回のラニーニャ現象は「冬の間は持続し、春に終息に向かう」そうです。また、気象庁の北西太平洋の海面水温と海流の見通し(1か月予報)によると、「1月下旬~2月中旬の間、東シナ海の海面水温は、平年より低い状態が続く見込み」だそうです。

まだしばらくは寒さが続くようですが、年が変わって、ほちほち春季の訪れが気になる時期となりました。平成23(2011)年は一体どのような年になるのでしょうか。大型クラゲの担当者である私は、いつ頃から東シナ海が暖かくなるのかが気掛かりです。恐らく、大型クラゲの卵にとっても今年の冬は厳しい寒さになっているのではないかと考えられます。私たち日本国民としては、今冬の低温が大型クラゲの出現に関して良い方向に作用するかなが、今から大変心配です。

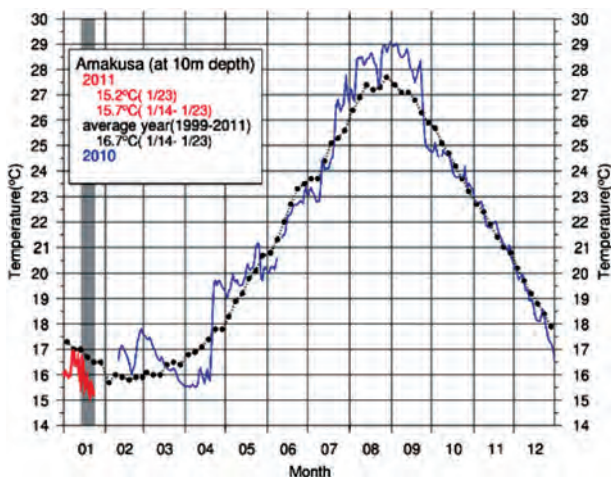


図1 熊本県天草町における定地水温変動

(*)ラニーニャ現象: 太平洋赤道域の日付変更線付近から南米のペルー沿岸にかけての広い海域で海面水温が平年に比べて低くなり、その状態が1年程度続く現象のこと(気象庁資料より)。